

シロイチモジヨトウに対する殺虫剤の効果



写真1 シロイチモジヨトウ幼虫



写真2 ピーマン葉での被害

表 シロイチモジヨトウ3齢幼虫に対する殺虫効果

IRAC コード	農薬名	希釈倍率	A地区		B地区	
			3日後	7日後	3日後	7日後
5	ディアナSC	2,500倍	100	100	100	100
6	アフーム乳剤	1,000倍	—	—	13.3	17.2
6	アニキ乳剤	1,000倍	100	100	100	100
11A	デルフィン顆粒水和剤	1,000倍	6.7	25.0	13.3	55.2
11A	ゼンタリー顆粒水和剤	1,000倍	25.0	17.9	10.0	56.7
11A	エコマスターBT	1,000倍	3.3	10.7	6.7	30.0
11A	エスマルクDF	1,000倍	10.0	6.7	6.7	10.0
11A	ジャックポット顆粒水和剤	1,000倍	10.0	0	3.3	3.4
13	コテツフロアブル	2,000倍	46.7	53.6	96.7	100
22A	トルネードエースDF	1,000倍	90.0	92.9	76.7	96.6
28	フェニックス顆粒水和剤	2,000倍	3.3	10.7	0	6.9
28	プレバソフフロアブル5	2,000倍	6.7	7.1	6.7	17.2
28	ベネビア0D	2,000倍	3.3	0	3.3	13.8
30	グレーシア乳剤	2,000倍	100	100	100	100
UN	プレオフロアブル	1,000倍	—	—	13.3	10.3
対照 (イオン交換水)			0	6.7	0	3.3

注1) 数値は補正死虫率(%)を示し、数値が大きいほど殺虫効果が高いことを表す。

なお、対照(イオン交換水)の数値は死虫率(%)を示す。

2) —は未実施を示す。

シロイチモジヨトウは広食性で、多くの作物を加害する重要害虫であり、高知県では主にネギで問題となります(写真1、2)。近年、他県では殺虫剤に対する防除効果の低下が報告されており、本県でも同様の事例がみられています。そこで、殺虫剤に対する感受性の実態を明らかにするため、県内のネギほ場からシロイチモジヨトウを採集し、15剤について殺虫効果を調査しました。

その結果、3齢幼虫に対する処理7日後の補正死虫率は、ディアナSC、アニキ乳剤、トルネードエースDF、グレーシア乳剤では90%以上と、高い殺虫効果を示しました。一方、コテツフロアブルでは、個体群によ

る差が大きく、殺虫効果が低下した可能性が示唆されました。また、アフーム乳剤、プレオフロアブルおよびジアミド剤(IRACコード28)では、いずれも20%未満であり、これらの殺虫効果が低下していると考えられました。さらに、BT剤(IRACコード11A)でも殺虫効果が低下していることが明らかになりました(表)。

これらのことから、本県のシロイチモジヨトウに対して多くの薬剤の殺虫効果が低下していることが明らかになりました。そのため、薬剤抵抗性の発達を抑えるためにも、系統の異なる薬剤をローテーションで散布することが重要です。

(昆虫担当 矢野稜人 TEL088-863-4915)